

# 「老水夫」の不安

— コールリッジ小論 —

松 田 修 明

## I

中世人のみるところでは、世界は「自然」として神の意志によって秩序づけられており、これは人為的に作り変えられたりするものではなかった。そして「自然法」とは本来神によって「自然」の中に組みこまれているはずのものであった。神の意志である「自然法」は「啓示」によって顕現していた。しかし宗教改革以後、個人を自覚した時代思潮の洗礼を受けた人は、中世の超越的な「自然法」の観念を個人に内在するものと考え、個人がそれぞれ独立の自然の権利を持ちつつ、しかも個人の理性によって認識しうる「自然法」に従って生活する社会を理想社会と考えた。近代哲学が生得的本有観念を否定し、知覚にもとづく理性の活動を唱える認識論として思索を開始したゆえんもここにある。そしてその背後には科学の進歩がある。ガリレイからニュートンに至り、それまでの演えきの理念に対して分析の理念が登場する。物理学の対象に対する帰納的推理による研究方法である。物理学研究の過程は、公理や原理にもとづいてその対象をみつめるのではなくて、その逆であると提唱された。事物の本性を探るにあたって一般的仮定から出発しその認識に到るという方法に代って、観察によって与えられたままの知識から出発して、そこから次第に自然現象の第一原因へ、その単純な要素へと解明して行く。裏を返せば、それは要素的原子から出発し、その機械論的結合によって世界の構成と秩序を理解しようとする思考法につながらざるをえないであろう。

かくして、国家においてはその構成分子たる「個人」の重要性が説かれるのである。「個」の概念に基礎づけられた政治理論がホッブスからロックに至り、その哲学的定着をみ、さらに市民社会の理論は商業資本主義の発展にともないアダム・スミスによって経済の分野で展開され、いわゆる「レッセ・フェール」の自由主義経済理論が完成されたことは周知のごとくである。スミスにおいては、経済社会は「利己心」を持つ原子的個人によって営まれ、そこには「神のみえざる手」によって「予定調和」がもたらされ、社会は進歩すると考えられていた。しかしスミスがその著書 **THEORY OF MORAL SENTIMENT**（「道徳感情論」）を残したにもかかわらず、現実には「機械が導入され、資本の重要さが益々増大するにつれて、労働者はたやすく機械の付属物となり、又それにとって代られるにいたる。そのとき、記憶に留められたのは、アダム・スミスの思想のうち、解明された利己主義が、社会福祉への鍵だというその面

だけであった<sup>1)</sup>。」更には、

Bentham and his followers such as James Mill (1773—1836), his son John Stuart Mill (1806—73), and Edwin Chadwick (1800—90) dominated English Radical thought throughout the century. Starting from the belief that men are prompted in their behaviour by the desire to seek pleasure and to avoid pain, and that the purpose of all legislation should be to promote 'the greatest happiness of the greatest number', Bentham founded a school of thought which, developing and changing in the hands of his disciples as the century progressed, provided a dynamic force of legal, social, political, and economic reform, and a touchstone for all governmental policies. The movement began by adopting completely the *laissez-faire*, individualistic doctrines of Adam Smith (1723—90) in economics, and a far-reaching programme of legal simplification and condensation which in time transformed the whole system of English common law and judicial procedure.<sup>2)</sup>

このような形で進展して行く社会の動向の中で、既に1789年のバスターユ占領がなされた同年に詩作されたという DESTRUCTION OF BASTILE において自由を賛美し、

And still, as erst, let favour'd Britain be

First ever of the first and freest of the free!

(DESTRUCTION OF THE BASTILE, 11.39—40.)

と自由がイギリスに定着せんことを切望して叫んだコールリッジは、1791年にケンブリッジのイエス学寮に進んだ。彼は政治・宗教・哲学・文学に精通し、政治に関していえば、それは彼の宗教観と非常に密接に結びついていた。コールリッジは生来平等主義者であり、貧者など、現実の社会機構の中で苦悩する者に心を寄せていた。人に貧困や苦悩を押しつけるものとして捉えた当時のイギリス社会に、彼が、満足できるはずはない。ケンブリッジ大学の優等生と称される前に、当時のコールリッジはまず学生運動家であったといえる。だから当時の学生たちがそうであったように、彼も当然のこのようにフランス革命を支持した。彼にあっては、フランス革命への支持は、単に政治形態の問題にとどまらず、人間と宗教といった問題とも結びつけて考えられていた。1794年のクリスマス・イブに書かれたという長詩 RELIGIOUS MUSINGS も、彼の宗教的思考と社会的政治的思考のない交ったものと解することができよう。そこには、フランス革命に対する深い共感と革命の結果生ずるはずの人間の未来に対する希望が語られている。

1) H.J.Laski, *Political Thought in England Locke to Bentham* (堀豊彦・飯坂良明訳『イギリス政治思想—ロックからベンサムまで—』岩波現代叢書, pp.176—77)

2) David Thomson, *England in the Nineteenth Century* (1815—1914), A Pelican Book, p.30.

1794年といえば、コールリッジが既に前年の12月、ケンブリッジ大学での生活に我慢できず大学を飛び出し、‘the 15th or king’s Regiment of Light Dragoons’ に志願入隊したが、遂には身分が割れ、ケンブリッジに連れ戻された年であり、ほどなく卒業の学位も取らぬまま、ケンブリッジを去ることになる年である。しかし、その時彼には、ロバート・サウジーらとの邂逅と、その心情の一致にもとづく「パンティソクラシー」建設の計画が用意されていたのである。海の向うのアメリカ、ペンシルバニアのサスケハナ河畔に土地を買い、小規模ながら、理想社会の新天地を開拓しようというのがサウジーとの間に生れた案であった。

## II

18世紀に入ってから商業資本主義の進展、それにともなう産業革命の進行、人々の「記憶にとどめられたのは、アダム・スミスの思想のうち、利己主義が社会福祉への鍵だという面だけであった」という現実、さらに功利主義思想に移行し、‘the greatest happiness of the greatest number’ の信条にもとづく「個」の価値の相対化、貧富の較差の増大。こうした時代の流れの途上、コールリッジはサウジーらと「パンティソクラシー」の実現を計るのである。

コールリッジには、彼が1794年に作った PANTISOCRACY と題する一篇の詩がある。

No more my visionary soul shall dwell  
On Joys that were; no more endure to weigh  
The shame and anguish of the evil day,  
Wisely forgetful! O'er the ocean swell  
Sublime of Hope, I seek the cottag'd dell  
Where Virtue calm with careless step may stray,  
And dancing to the moonlight roundelay,  
The wizard Passions weave an holy spell.

(PANTISOCRACY, 11. 1—8.)

3行目の ‘the evil day’ を「コールリッジの私的生涯の一時期と考えるか、さらに大きな意味で十八世紀末の時代を意味するものとうけとるかは人の自由である。しかし現世（少なくとも彼の同時代）の価値意識とは異なる価値観によって彼の理想社会のヴィジョンが成立していたことを示している<sup>3)</sup>。」コールリッジが「パンティソクラシー」に託していたのは、人間の美徳の横溢であり、—

The leading idea of pantisocracy is to make men *necessarily* virtuous by removing all motives to evil —all possible temptation.<sup>4)</sup>

そこにおいて現実的施策としてとらるべき、共産と私有財産制の廃止のもとで、それは実現

3) 磯田光一著『比較転向論序説—ロマン主義の精神形態—』勁草書房、p.213

4) J.A.Richards (ed), *The Portabe Coleridge*, The Viking Press, p.236.

されるはずであった。

ウィリアム・ワーズワスが革命進行中のフランスに渡り、ミシェル・ボーピュイというフランス将校と交情を結び、この人物を通して革命の同調者となることは周知のごとくである。ワーズワスは『序曲』第九巻で彼との交情を記している。その中で最も私たちの心を打つのは、二人が路上で出会った一少女についての挿話であろう。—

And when we chanc'd  
One day to meet a hunger-bitten Girl,  
Who crept along, fitting her languid self  
Unto a Heifer's motion, by a cord  
Tied to her arm, and picking thus from the lane  
Its sustenance, while the Girl with her two hands  
Was busy knitting in a heartless mood  
Of solitude, and at the sight my Friend  
In agitation said, 'Tis against *that*  
Which we are fighting,' I with him believed  
Devoutly that a spirit was abroad  
Which could not be withstood, that poverty  
At least like this, would in a little time  
Be found no more, that we should see the earth  
Unthwarted in her wish to recompense  
The industrious, and the lowly Child of Toil,  
All institutes for ever blotted out  
That legalised exclusion, empty pomp  
Abolish'd, sensual state and cruel power  
Whether by edict of the one or few,  
And finally, as sum and crown of all,  
Should see the People having a strong hand  
In making their own Laws, whence better days  
To all mankind.

(THE PRELUDE, 1805, Bk. IX, 510—33.)

コールリッジは、このワーズワスの思いを私たちに想起させるような一つの挿話を、1794年7月6日付のサウジーへの手紙に記している。—

It is *wrong*, Southey! for little girl with a half-famished sickly baby in her arms to put her head in at the window of an inn—"Pray give me a bit of bread and meat!" from a party dining on lamb, green peas, and salad Why? Because is it *impertinent* and *obtrusive*! "I am a gentleman! and wherefore the clamorous voice of woe intrude upon mine ear?" My companion is a man of cultivated, though not vigorous under-

standing ; his feelings are all on the side of humanity; yet such are the unfeeling remarks, which the lingering remains of aristocracy occasionally prompt. When the pure system of pantisocracy shall have *aspheterized*……, instead of travelling along the circuitous, dusty, beaten highroad of diction, you thus cut across the soft, green, pathless field of novelty ! ……<sup>5)</sup>

‘aspheterized’ という語がイタリック体で記されていることからしても、コールリッジが、いかに私有財産の撤廃ということを、理想としていたかをうかがうことができよう。そしてこの少女の貧困も、この友達に残っている貴族主義も、「パンティソクラシー」のもとでは、完全にぬぐい去られるはずであった。D. H. Lawrence も ‘Lucky Coleridge, who got no farther than Bristol.’<sup>6)</sup> と言っているように、結局のところ「パンティクラシー」建設の企ては失敗に終るのであるが、それが「幸運」であったかどうかは別にして、さしあたって私たちにとって重要なのは、私有財産の撤廃というコールリッジの理想が、彼の同時代の推移を考えあわせるとき、現実を否定するという地点に成立していたということだろう。

### Ⅲ

1797年10月16日付でコールリッジが送った Thomas Poole への手紙によると、コールリッジの父親は、彼が八才のとき亡くなったが、コールリッジには記憶に残る一つの思い出があった。父親と家路を辿るある夕暮れどき、彼は父親から、星の名前、木星のこと、星と太陽との関係といった宇宙の話聞いた。彼はその話を深い喜びと感嘆の気持を抱いて聞いたが、不思議だとか、信じられないといった気持は抱かなかったという。その理由として彼は次のように記している。

For from my early reading of fairy tales and genii, etc., etc., my mind had been habituated to the Vast,……<sup>7)</sup>

そしてこれを糸口に、彼の議論は「個」と「全体」の問題へと進んで行き、今や確立された物理学的対象に向けられる帰納的研究法、要素的原子から出発して、そのメカニカルな結合によって、世界の構成と秩序を理解しようとする思考法、ひいては現実の社会における「個」の有り様に対する批判へと進むことになるのだ。彼は続ける。—

Those who have been led to the same truths step by step, through the constant testimony of their senses, seem to me to want a sense which I possess. They contemplate nothing but *parts*, and all *parts* are necessarily little. And the universe to them is but a mass of *little things*.<sup>8)</sup>

そして同日、John Thelwall に宛ててしたためられた手紙には、同じ思いが次のように記され

5) *ibid.*, pp. 230—1

6) D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature*, A Penguin Book, P. 28.

7) *ibid.*, pp. 224—5.

8) *ibid.*, p. 225.

ている。——

..more frequently *all things* appear *little*, all the knowledge that can be acquired child's play; the universe itself! what but an immense heap of *little things*? I can contemplate nothing but *parts*, and parts are all *little*! My mind feels as if it ached to behold and know something *great*, something *one* and *indivisible*....<sup>9)</sup>

こうしたコールリッジの記述は、次のようなキルケゴールの言葉をも思い起すことを、私たちに許してくれそうである。——「人間は個体であるということ、そしてそのようなものとしてそれは同時に彼自身であるとともに全人類であり、従って全人類が個体に参与しているとともに個体も全人類に参与しているということ<sup>10)</sup>。」

ともかくも、コールリッジは現実の機械論的思考法に、異議を提出し、その実践者たちを厳しく評するのである。——

I have known some who have been *rationaly* educated, as it is styled. They were marked by a microscopic acuteness, but when they looked at great things, all became a blank and they saw nothing,.....<sup>11)</sup>

又、ニュートンに対しても、コールリッジは、諸実験にみられる几帳面さ、実験から直接引き出されたものの持つ正確さには高い評価を与えながらも、ニュートンのさまざまの見解は、彼の実験から導き出されたもののみを基調としているが故に、彼の論理全体が、皮相的なものに終わっているという信念を吐露し、更には、

Newton was a mere materialist. *Mind*, in his system, is always *passive*,—a lazy *Looker-on* on an external world.<sup>12)</sup>

と続けて記している。

#### IV

今や現実の世界は合理主義的なものだけに支配される世界になっている。科学は人間の存在を含め、また人間的なものすべてを含めて、あらゆるものをそのメカニカルな世界のうちに解消させる。

「老水夫」は、「太陽のせい」でアラビア人を殺すあの『異邦人』の主人公のように、無目的、無動機の行為——信天翁の射殺——を行なう。が、コールリッジはこうした行為が、現実の日常世界における人間にとって、必ずしもゆゆしき問題とはなりえないことを知っていたのではなかったか。他の二百人にのぼる乗組員は、「人影も獣の姿もみえない! 狭霧と一面水の国脱出の「よき南風」をもたらしてくれた信天翁を殺したのはお前だぞと、口々に証言しあい、

9) *ibid.*, p. 256.

10) 『不安の概念』 斎藤信治訳, 岩波文庫, p. 43.

11) I.A.Richards. *op. cit.*, p. 225

12) *ibid.*, p. 273

一同「老水夫」を責める。——

....all averr'd, I had kill'd the Bird  
That made the Breeze to blow.

(THE RIME OF THE ANCYENT MARINERE,<sup>13)</sup>11.91—2)

しかし、吉兆の鳥が、姿を消したにもかかわらず、「神の頭のごとく、さんさんと太陽がのぼってくる」と、

Then all averr'd, i had kill'd the Bird  
That brought the fog and mist.  
'Twas right, said they, such birds to slay  
That bring the fog and mist.

(THE ANCYENT MARINERE, 11.95—8)

ということになるのである。コールリッジは時代のこうした便宜主義的な精神形態をみぬいていたのだ。「老水夫」の周囲には、ただ腐った海とその海上を這い回る異様な生きもの（'slimy things'）、夜には 'Death-fires' の乱舞と異様に燃える海という奇怪な醜の世界が広がるのみ。——

The very deeps did rot:O Christ !  
That ever this should be !  
Yea, slimy things did crawl with legs  
Upon the slimy Sea.

About, about, in reel and rout  
The Death-fires danc'd at night;  
The water, like a witch's oils,  
Burnt green and blue and white.

(THE ANCYENT MARINERE, 11. 119—26)

ケンブリッジの優等生、雄弁な学生運動家であったコールリッジは、かつて現実の世界観を否定し、理想的平等社会「パンティソクラシー」の実現を計ったが、その夢は破れ、1798年には、FRANCE : AN ODE において、彼がかつて熱狂的に賛美した「自由」の祖国フランスに裏切られた経過と、激怒の情を綴るに至るのである。

時代はコールリッジを現実のうちへと解消し、彼を否定しようとする。彼がいかに故郷を求めていたか。「老水夫」は、苦しい船路の果てに、故郷を目にして叫ぶ。——

O dream of joy ! is this indeed

---

13) 『老水夫の歌』の原詩引用はすべて1798年版で、テキストは、W.J.B. Owen (ed.) , *Wordsworth and Coleridge Lyrical Ballads* 1798, OUP. である。尚その他のコールリッジの詩篇引用は、E. H. Coleridge (ed.) , *The Poems of Samuel Taylor Coleridge*, Oxford Standard Authors. によっている。

The light-house top i see ?  
Is this the Hill ? Is this the Kirk ?  
Is this mine own countrée ?

(THE ANCYENT MARINERE, 11.469—72)

『老水夫の歌』が作られる六ヶ月程前、コールリッジは兄ジョージに献じた詩篇の中で、彼の寄る辺ない孤独な魂の悲しみを記している。——

....at times

My soul is sad, that I have roam'd through life  
Still most a stranger,.....

(TO THE REV. GEORGE COLERIDGE, 11.39—41)

が、だからといってこの現世を逃れることも出来ない。こうした心的状態で捉えられた現実こそまさに、

唇は赤く、<sup>おもて はち</sup>面に羞らひなく  
髪は<sup>こがね</sup>黄金なす黄に  
膚<sup>はだえ</sup>白きこと<sup>かた</sup>癩者のごとく  
死に似ること<sup>つれあひ</sup>伴侶にまさり  
その<sup>しし</sup>肉しづかなる<sup>こご</sup>大気を凍えしむ<sup>14)</sup>

「かの女」の支配する世界であろう。「老水夫」のことは、

Alone, alone, all all alone  
Alone on the wide wide Sea;  
And Christ would take no pity on  
My soul in agony.

The many men so beautiful,  
And they all dead did lie !  
And a million million slimy things  
Liv'd on—and so did I.

(THE ANCYENT MARINERE, 11.224—31)

もこうしたコールリッジの心情の反映とみなすことができよう。このような精神状態において、支えを宗教的なものに求めたとしても不思議ではない。しかし「老水夫」は、祈ろうとしても祈れない。——

I look'd to Heaven, and try'd to pray;  
But or ever a prayer had gusht,  
A wicked whisper came and made  
My heart as dry as dust.

(THE ANCYENT MARINERE, 11. 236—39.)

14) 前川俊一訳詩集『緑蔭抄』英宝社 P. 144.

松田：「老水夫」の不安

彼は Cain の言に託して叫ぶ、——

“O that I might be utterly no more ! I desire to die.....”<sup>15)</sup>

だがそれもできないのである。——

And yet I could not die.

(THE ANCYENT MARINERE, 1.254.)

こうした精神的極限状態において、人にいかなるなす術が残されているだろうか。

そのとき、偶然にも月がのぼり、「老水夫」を取り巻く奇怪な醜の世界が、月の光に照らし出される。

The moving Moon went up the sky

And no where did abide:

Softly she was going up

And a star or two beside

Her beams bemock'd the sultry main

Like morning frosts yspread;

.....

(THE ANCYENT MARINERE, 11.255—60)

その月光のもとに、これまでの醜の世界は突然、美の世界に転じ、思わず（'unaware'）彼は海蛇を祝福し、「愛の泉」が心の奥からほとぼしり出るのを自覚する。——

O happy living things ! no tongue

Their beauty might declare:

A spring of love gusht from my heart,

And I bless'd them unaware !

Sure my kind saint took pity on me,

And I bless'd them unaware.

(THE ANCYENT MARINERE, 11.274—79)

そのとき彼は、初めて祈りを得るのである。

## V

ワーズワス兄妹との出会い、ワーズワスの自然との触れ合いは、確かにコールリッジにとって一つの救いであった。コールリッジが既に1795年8月に、

O ! the one Life within us and abroad,

Which meets all motion and becomes its soul,

A light in sound, a sound-like power in light,

Rhythm in all thought, and joyance every where——

Methinks, it should have been impossible

15) see. THE WANDERING OF CAIN.

Not to love all things in a world so fill'd;  
Where the breeze warbles, and the mute still air  
Is Music slumbering on her instrument.

(THE EOLIAN HARP, 11.26—33.)

という一節を残しているということを重視すれば、いわば同志の出会いだったと言ってもよいであろう。

当時、詩人ワーズワスが、絶望、混迷、錯乱のなかから再発見した「自然」は、『序曲』第一巻の、幼少の時代他人の罾にかかっている獲物を盗んだときや、羊飼いのボートを無断で乗り回したときの挿話、又 NUTTING などの詩篇にみられるように、何か恐怖をもって、不道徳な行為に対して、彼に悔悛を求めた「自然」であり、

One impulse from a vernal wood  
May teach you more of man;  
Of moral evil and of good,  
Than all the sages can.

(THE TABLES TURNED, 11.21—4.)

という表現にも見られるように、教化作用を有するもの、人間の教導者として、深い恵みをもたらす「自然」であった。ワーズワスの「自然」への愛の深さを疑う人はいないだろう。――

And I have felt

A presence that disturbs me with the joy  
Of elevated thoughts; a sense sublime  
Of something far more deeply interfused,  
Whose dwelling is the light of setting suns,  
And the round ocean, and the living air,  
And the blue sky, and in the mind of man,  
A motion and a spirit, that impels  
All thinking things, all objects of all thought,  
And rolls through all things. Therefore am I still  
A lover of the meadows and the woods,  
And mountains; and of all that we behold  
From this green earth; of all the mighty world  
Of eye and ear, both what they half-create,  
And what perceive; well pleased to recognize  
In nature and the language of the sense,  
The anchor of my purest thoughts, the nurse,  
The guide, the guardian of my heart, and soul  
Of all my moral being.

(TINTERN ABBEY, 11.94—112.)

松田：「老水夫」の不安

ワーズワスは「宇宙にはもろもろの力があって、自然に私たちの心に印象をきざみ、私たちは賢い受身の立場に身をおいて、心を養うことができる」という境地に至る。——

‘Nor less I deem that there are powers,  
‘Which of themselves our minds impress,  
‘That we can feed this mind of ours,  
‘In a wise passiveness.  
  
‘Think you, mid all this mighty sum  
‘Of things for ever speaking,  
‘That nothing of itself will come,  
‘But we must still be seeking?

(EXPOSTULATION AND REPLY, 11.21—8.)

このように捉えられた「自然」は、もはや風光明媚、心の慰めを人に与えるものとしての「自然」にとどまらず、いわば信じるに足る宗教的対象に近いものであり、汎神論的なものとなってくる。

早くも1795年には、麻薬を服用したと伝えられるほどに、社会的にも精神的にも孤独であったコールリッジは、その魂の支えをワーズワス的自然に求めるのである。1797年6月、彼はサウジー宛の手紙でワーズワスを次のように賞賛している。

Wordsworth is a very great man, the only man to whom *at all times and in all modes of excellence* I feel myself inferior, the only one, I mean, whom *I have yet met with*, for the London *literati* appear to me to be very much like little potatoes, that is, *no great things*, a compost of nullity and dullity.<sup>16)</sup>

又、THIS LIME-TREE BOWER MY PRISON という詩篇をもって、チャールズ・ラムに向って、

....thou hast pined  
And hunger'd after Nature, many a year,  
In the great City pent, winning thy way  
With sad yet patient soul, through evil and pain  
And strange calamity! ....

(11.28—32.)

と綴っているが、私たちはこの‘thou hast’を‘I have’に、‘thy’を‘my (or mine)’に置き換えて読むこともできるはずである。そして FROST AT MIDNIGHT, FRACE: AN ODE, FEARS IN SOLITUDE, THE NIGHTINGALE などにワーズワス的自然、ワーズワス的幻想が深く及んでいることは周知のごとくである。

コールリッジには月の描写が多くみられ、それらの月がワーズワス兄妹との交際に大きな影

16) I.A.Richards, op.cit., p.255

響を受けていることは、ドロシーの日記などでよく知られているところであるが、「老水夫」の船路の転機となるあの海蛇の祝福と祈りをもたらしした月（月光）も、ワーズワスの自然と不可分のものとみなすことができよう。その場面を読むとき、私たちは『序曲』第一巻の、少年ワーズワスが羊飼いのボートを無断で乗り出したときの挿話にみられる、月と水の織りなす情景描写を思い起すだろう。――

The moon was up, the Lake was shining clear  
Among the hoary mountains;.....

.....not without the voice  
Of mountain-echoes did my Boat move on,  
Leaving behind her still on either side  
Small circles glittering idly in the moon,  
Until they melted all into one track  
Of sparkling light.

(11.383—4; 11.389—94.)

VI

さて、確かにあの海蛇祝福の瞬間を機に、「老水夫」は故郷への船路を辿ることになる。しかし彼が超自然的な力の支配する世界を脱しているわけではない。いやそれどころか、超自然的な力が「老水夫」の生を支配している以上、あの祝福と祈りも、「老水夫」にとって偶然に過ぎないのではなかったか。

「老水夫」の帆船は進み始める。しかしそれは自然の力によるものではない。――

.....the ship mov'd on;  
Yet never a breeze up-blew;  
.....

(THE ANCYENT MARINERE, 11.327—28.)

実は「霧と雪の国の霊」が、船を動かしていたことが、後で判るのであるが。――

Under the keel nine fathom deep  
From the land of mist and snow  
The spirit slid:and it was He  
That made the Ship to go.

(THE ANCYENT MARINERE, 11.382—85.)

風はない。帆船が進むにあたって、他に考えられる自然条件も見当らない。しかし、確かに船は動いている。この奇怪な現実と、その現実を翻弄される自己に対する「老水夫」の不安、恐怖。作者はその心的状況を強調するために、既に死んだはずの水夫たちがうめき、起きあがり、無言の作業につくという恐ろしい情景を持ち出しているのだ。――

松田：「老水夫」の不安

Beneath the lightning and the moon  
The dead men gave a groan.

They groan'd, they stirr'd, they all uprose,  
Ne spake, ne mov'd their eyes:  
It had been strange, even in a dream  
To have seen those dead men rise.

We were a ghastly crew.

(THE ANCYENT MARINERE, 11.321—26;1.332.)

船は一度止まるが、やがてまた動き始める。突然船が躍り跳ねるように揺れ、「老水夫」は倒れ伏し、気絶する。その気絶から覚める寸前、彼は二つの声を聞く。「一の声」が問う。——

'What makes that ship drive on so fast ?

'What is the Ocean doing ?

(THE ANCYE NT MARINERE. 11.417—18.)

私たちはこのとき、「老水夫」の船は潮の流れに乗っているのでは、と想像する。しかし作者は「二の声」に答えさせる。——

'Still as a Slave before his Lord,

'The Ocean hath no blast:

'His great bright eye most silently

'Up to the moon is cast—

(THE ANCYENT MARINERE, 11.419—22.)

そして作者はもう一度、その船は超自然的な力によって動いているということを「一の声」に託して強調しているように思われる。——

'But why drives on that ship so fast

'Withouten wave or wind ?

(THE ANCYENT MARINERE, 11.427—28.)

目覚めた「老水夫」は、再びこの奇怪な現実には、納骨堂の不気味さが呼び起すに似た不安と恐怖にかられる。——

All (=the dead men) stood together on the deck,

For a charnel-dungeon fitter:

All fix'd on me their stony eyes

That in the moon did glitter.

(THE ANCYENT MARINERE, 11.439—442.)

やがてそよ風が訪れる。それは牧場にそよぐ春風のものであった。船は飛ぶように進んで行く。しかしその微風によって走っているのではない。——

Swiftly, swiftly flew the ship,  
Yet she sail' d softly too:  
Sweetly, sweetly blew the breeze—  
*On me alone it blew.*

(THE ANCYENT MARINERE, 11.465—68; italics mine.)

かくして「老水夫」は故郷に辿りつくのであるが、彼の帰郷が、超自然的な力によるものであることを、コールリッジは最後まで強調しているようにみえる。そしてコールリッジにとって、ここにみられる超自然的な力とは、個人の運命を避けがたい状況へとうながす存在のようである。それは人に、いわば「偶然」をみちびくものと言い換えてもよい。「老水夫」の運命が、振られた賽の目によって決められたという重大な事実もある。——

The naked Hulk alongside came  
And the Twain were playing dice;  
'The Game is done! I've won, I've won!'  
Quoth she, and whistled thrice.

(THE ANCYENT MARINERE, 11.191—95.)

ワーズワスが、『抒情民謡集』第二版に、その用語の古さなどを理由に、『老水夫の歌』をおさめるのをしぶったことはよく知られていることである。そして、ワーズワスは「老水夫」の行動が、能動的でなく、常に受身に終始している点を『老水夫の歌』の重大な欠点の一つとして指摘している<sup>17)</sup>。その意味するところは、「老水夫」の生が自らの意志、自由意志によるものではないということだろう。言い換れば、その生に一貫性がないということ、即ちその生に因果関係がないということだろう。

確かにワーズワスが指摘したように、「老水夫」の運命は、推移する周囲の状況のみに決定されて行く。「偶然」の連鎖によって成り立っているかにみえるその生には、自由意志の発露はみられないようである。「老水夫」は、その受動的な生の果てに、辿りついた彼の故郷の大地に確と立ったはずであった。——

And now all in mine own Countrée  
I stood on the firm land!

(THE ANCYENT MARINERE, 11.603—4.)

が、私たちが注目すべきは、彼がその地に安住することができなかつたということだろう。彼は「夜のごとく」さ迷い続けねばならなかつたのである。このとき私たちは、受動の生のさ中に、「老水夫」を襲ったあの不安と恐怖の感情を思い出さなければならない。先にちょっと触れたように、この『老水夫の歌』に流れる恐帷派的趣向は、「老水夫」のこの不安と恐怖の内面を読者に反映させるために、コールリッジが仕組んだ技巧であつたと言つてよい。

17) see. A.M. Buchan, 'The Sad Wisdom of the Ancient Mariner', *Twentieth Century Interpretations of the Ancient Mariner* edited by James D. Boulger, A Spectrum Book, p.92.

松田：「老水夫」の不安

さて、個人の意志に関係なく働き、その訪れを予知することもできない超自然的な力が、「老水夫」の運命を支配していたにしても、確実なことは、その力が受動的な生を生きる「老水夫」に与えたものは、極限的な不安と恐怖の感だったということである。換言すれば、「運命」とか「偶然」というものが、それを支配する超自然的な力の働きによって、人間にとって根源的な存在するということへの不安・恐怖の自覚を、「老水夫」にうながしたということである。こうした不安、恐怖を生の確認として受けとった「老水夫」は、個人が個人であることの本質を否定され、個人が受動的な生活を享受している現実の世界、個人の運命が、自己の意志に関係なく、周囲の状況によって決定されているような現実の日常世界に、もはや定住することはできない。――

I pass, like night, from land to land;  
I have strange power of speech;  
The moment that his face I see  
I know the man that must hear me:  
To him my tale I teach.

(THE ANCYENT MARINERE, 11.619—23.)

そして彼が、時代の日常的現実生きる「婚礼の客」に強調したかったのは、

……this soul hath been  
Alone on a wide wide sea;  
So lonely 'twas, that God himself  
Scarce seemed there to be.

(THE ANCYENT MARINERE, 11.630—34.)

というこの四行に尽きるのではなかったか。

VII

コールリッジは1798年3月、兄ジョージに宛てた手紙で、次のように記している。

I believe most steadfastly in original Sin; that from our mothers' wombs our understandings are darkened; and even where our understandings are in the Light, that our organization is depraved, & our volitions imperfect; and we sometimes see the good without *wishing* to attain it, and oftener *wish* it without the energy that wills & performs—And for this inherent depravity, I believe, that the *Spiris* of the Gospel is the sole cure.<sup>18)</sup>

コールリッジのこうした「原罪」意識の記述が、どの程度信用できるのか、ここで確認することはできない。が、「不安が原罪の前提であり、同時にそれは原罪を根源の方向に遡って解明

18) quoted by Edward E. Bostetter, 'The Nightmare World of The Ancient Mariner, 'Coleridge A Collection of Critical Essays edited by Kathleen Coburn, A Spectrum pp.75—6.

19) 『不安の概念』 齊藤信治訳 岩波文庫 p.74.

するものである」<sup>19)</sup>というキルケゴールの言葉を文字通り借用すれば、少なくとも当時のコールリッジが自己の有り様に対して抱いていた不安と恐怖の念が、この一節にも裏付けされると考えることができる。近代合理主義のもたらしたメカニカルな 'cold inanimate world' において、'an immense heap of little things' という形でしか捉えられない「個」のあり方、状況によって自己の運命と生活が決定されて行くような、自由意志を喪失した個人のあり方に対して、個人の成立根拠の危機を訴えるコールリッジの意識は、

.....

All individual dignity and power  
Engulfed in Courts, Committees Institutions,  
Associations and Societies,  
A vain, speech-mouthing, speech-reporting Guild,  
One Benefit-Club for mutual flattery,  
We have drunk up, demure as at a grace,  
Pollutions from the brimming cup of wealth;  
Contemptuous of all honourable rule,  
Yet bartering freedom and the poor man's life  
For gold, as at a market !

(FEARS IN SOLITUDE, 11.54—63.)

という一節からも感じとることができよう。そしてコールリッジは、具体的に個人として存在する自分自身を重視し、自己の内面の深淵をうかがうことによって、自己の真実を追求することから、その哲学的思索を開始するのである。——

And haply by abstruse research to steal  
From my own nature all the natural man—  
This was my sole resource, my only plan:  
Till that which suits a part infects the whole,  
And now is almost grown the habit of my soul.

(DEJECTION: AN ODE, 11.89—93.)

心的な領域深く沈潜しようとするコールリッジの意識が、個人の存在根拠が見失なわれた危機的状况の中で、あくまで個人が個人として現実に存在することの可能性を問い直す過程の中に、見出されるとすれば、

.....the greater & perhaps nobler certainly all the subtler parts of one's nature,  
must be solitary—Man exists herein to himself & to God alone /—Yea, in how  
much only to God—how much lies *below* his own Consciousness.<sup>20)</sup>

という言葉も、フロイトの深層心理学的観察の先駆をなしているというよりも、むしろ神に向

20) quoted by Patricia M. Adair, *The Waking Dream A Study of Coleridge's Poetry*,  
Edward Arnold, pp.83—4

松田：「老水夫」の不安

う実存主的義的な様相をおびてくることになるだろう。そしてワーズワスが、静かな湖のほとり  
りで一人の少年と梟の群が対話を交すあの **THERE WAS A BOY** の世界を形成するものとして捉えた「自然」の中に、コールリッジが

‘…the Ivy-tod is heavy with snow,  
‘And the Owlet whoops to the wolf below  
‘That eats the she-wolf’s young.

(THE ANCIENT MARINER, 11.568—70.)

という残酷な一面をも見、又 **THE NIGHTINGALE** では、

…some night-wandering man whose heart was pierced  
With the remembrance of a grievous wrong,  
Or slow distemper, or neglected love,  
(And so, poor wretch! filled all things with himself,  
And made all gentle sounds tell back the tale  
Of his own sorrow) ………

(THE NIGHTINGALE, 11.16—21.)

としての自己の姿を暗に表現し、更には

All this long eve, so balmy and serene,  
Have I been gazing on the western sky,  
And its peculiar tint of yellow green:  
And still I gaze—and with how blank an eye!  
And those thin clouds above, in flakes and bars,  
That give away their motion to the stars;  
Those stars, that glide behind them or between,  
Now sparkling, now bedimmed, but always seen:  
Yon crescent Moon, as fixed as if it grew  
In its own cloudless, starless lake of blue;  
I see them all so excellently fair,  
I see, not feel, how beautiful they are!  
I may not hope from outward forms to win  
The passion and the life, whose fountains are within.

(DEJECTION: AN ODE, 11.27—38; 11.45—46.)

と記すに至る過程は、あの「老水夫」の不安・恐怖と決して無縁ではないはずである。

引用以外の主な参考書目

THE LYRICAL BALLADS 1798—1805, ed. George Sampson, Methuen English Classics.

THE RIME OF THE ANCIENT MARINER, ed. Takeshi Saito, Kenkyusha.

『老水夫の歌—詩形リズム注解—』石白村著 篠崎書林。

BIOGRAPHIA LITERARIA, ed. George Watson, Everyman's Library.

THE PRELUDE (Text of 1805) ,ed. E. D. Selincourt, OUP.

JOURNALS OF DROTHY WORDSWORTH, ed. Mary Moorman, Oxford Paperbacks.

WILLIAM WORDSWORTH THE EARLY YEARS 1770—1803 by Mary Moorman, OUP.

THREE GOTHIC NOVELS, ed. Mario Praz, Penguin Books.

COLERIDGE AS PHILOSOPHER by J. H. Muirhead, George Allen & Unwin.

COLERIDGE THE VISIONARY by J. B. Beer, Chatto & Windus.

COLERIDGE AND CHRISTIAN by J. Robert Bath, S. J., Harvard UP.

MILK OF PARADISE by M. H. Abrams, Octagon Books.

THE MIRROR AND THE LAMP by M. H. Abrams, OUP.

POLITICS IN ENGLISH ROMANTIC POETRY by Carl Woodring, Harvard UP.

AGRARIAN AGE A BACKGROUND FOR WORDSWORTH by Kenneth MacLean,  
Archon Books.

高橋康也著『エクスタシーの系譜』あぼろん社。

THE ROMANTIC IMAGINATION by C. M. Bowra, OUP.

THE USE OF POETRY AND THE USE OF CRITICISM by T. S. Eliot, Faber & Faber.

Jean-Paul Sartre, LITERARY AND PHILOSOPHICAL ESSAYS, trans. Annette  
Michelson, Radius Book.

『啓蒙主義の哲学』E・カッシーラー著／中野好之訳 紀伊国屋書店。

(原稿受理1972.10.16)